

災害復興過程におけるコミュニティラジオの可能性

岩手県野田村「のだむラジヲ」の軌跡から

大阪大学大学院人間科学研究科 講師 石塚裕子、教授 渥美公秀、

特定非営利活動法人久慈広域観光協議会 事務局長 貫牛利一、野田村商工会 会長 小野寺健二



1. 被災地のコミュニティラジオ

コミュニティラジオは、地域に根ざした公共性（小さな公共圏）を形成・維持・発展させる可能性をもったメディアとして捉えられてきた。北郷（2015）は、コミュニティラジオを「住民自らの参加と創造を伴うコミュニケーション」を醸成するメディアとして位置づけ、小さな公共圏の確立に向けた方略に関する議論を展開している。一方、被災地でのコミュニティラジオは、臨時災害放送局に代表されるように、緊急時に地域に即した情報を受発信するメディアとして注目を浴びることが多い（北郷, 2015）。しかし、災害復興過程におけるコミュニティラジオについては、その必要性が阪神・淡路大震災当時から議論され、東日本大震災以降は、各地で研究会が開催されたり（江幡, 2016）、ラヂオ気仙沼など臨時災害放送局がコミュニティ放送局に移行して開局したりした事例もある。しかし、その数は少なく、復旧期後の復興過程におけるコミュニティラジオの役割、効果などの検証は十分に行われていないのが現状である。本稿では津波被災地の岩手県野田村においてコミュニティラジオ局の開設をめざして、筆者らが村民有志と約 7 年半取り組んできた軌跡をたどり、その変遷から復興過程におけるコミュニティラジオ活動、ラジオ番組制作の意義について考察する。

2. 「のだむラジヲ」とは

「のだむラジヲ」の活動は、2011 年 12 年に村民と災害ボランティアの有志がコミュニティラジオ放送研究会を立ち上げたことに始まる。東日本大震災では停電のためにテレビから情報が得られない中で、村民有志の一人である小野寺健二氏がラジオの役割を再認識し、行政からだけでなく村民自らが災害時に情報

を提供、発信するべきだと感じ、野田村にもコミュニティラジオ局が必要だと思い立ったことがきっかけである。

2012 年 8 月に初めて、野田まつりの会場において、村民有志と大阪大学の学生らによりイベント放送を行った。その後、コミュニティラジオ局の開設をめざしたいという機運が高まり「のだむラジヲ開局準備会」を村民有志 4 名と筆者ら、大阪大学の学生など外部者の約 10 名で 2013 年 12 月に設立し、2019 年 5 月に休止するまでの約 5 年半の間、活動を展開してきた。

のだむラジヲの活動理念は「野田村民による野田村民のための野田村民のラジオ」であった。本活動は単にコミュニティラジオ局の開設に止まらず、村民の地域アイデンティティの醸成の場となり、むらづくりのハブとなることをめざし、東日本大震災からの復興のコミュニティ・アーカイブズとして番組を残してきた。活動の経緯は表 1 に示すとおりである。3 つのステージに分けて軌跡を紹介する。

表 1 のだむラジヲの軌跡

時期	主な取り組み
2011.12	研究会立ち上げ
2012.08	野田まつりでイベント放送を行う
2013.12	「のだむラジヲ開局準備会」を設立
2014.03	移動スタジオ放送（村内イベント会場での放送）の開始
2014.11	公開研究会の開催を開始 「のだむラジヲ創る会」
2014.12 ～2015.2	FM 岩手放送の地域限定番組「くじなのだ」を担当
2015.03	「のだむラジヲたより」発行
2016.07	のだむラジヲスタジオ開所
2017.02	のだむラジヲフェスタ（第 1 回）開催
2018.02	のだむラジヲフェスタ（第 2 回）開催
2018.05	野田村役場との勉強会を開始

(1) 軌跡 1 : コミュニティラジオ局の開設をめざす

2013年12月14日に設立した「のだむラジヲ開局準備会」(以下、のだむラジヲと示す)は、協議の結果、開局目標年次を2017年春とした。ここから「3年後には開局」を合言葉に何度も会合をもち、放送技術の習得を兼ねた移動スタジオ放送を開始した。放送は若手の有志2名が中心となり、大阪大学の教員、学生たちが外部者として協力して行った。移動スタジオ放送とは、村民が集まる市日や季節行事の会場、仮設住宅集会所など様々な所へ出かけて、仮設のスタジオを設置して行うイベント放送である(写真1)。



写真1 移動スタジオの様子

このような活動を始めた最中に、県域放送局(エフエム岩手)よりエリア限定ラジオの社会実験事業(番組名「くじなのだ」)への協力要請があり、のだむラジヲとして参画することになった。この事業への参画は、のだむラジヲのメンバーが本物のラジオ放送を経験する貴重な機会となり、放送技術の向上に大いに寄与した。さらにこの事業は、ラジオ放送に関心の高い有志による活動だけでなく、多数の村民が関わる活動へと方針を転換する転機となった。これまで有志のみで協議してきた会合の一部を公開型とした。また、県域放送局と協働で実施する試験放送番組には可能な限り多くの村民に出演してもらうことをめざした。その結果、2014年12月～2015年2月末までの計14回の試験放送に、16団体、延べ50名以上の村民が試験放送番組に出演することができた(表2、写真2)。また、公開型の会合(「のだむラジヲ創る会」)を開催

するほか、2015年3月から「のだむラジヲだより」を発行して村内全世帯に配布した。このような取り組みを経て、のだむラジヲの認知は村内に徐々に広まっていった。

第2回創る会(2015年3月12日)では、試験放送番組に出演した約20名の村民が集まり、出演した感想やコミュニティラジオの役割などについて語り合った。その中で、「ラジオで話すことで、これまでの自分の活動を振り返る良い機会となった」、「時間が足りなくて活動について伝え切れなかった。もっと話

表2 くじなのだ「のだむラジヲコーナー」

放送日	内容	出演者数	
12月	4日	のだむラジヲ開局準備会のこれまでとこれから	3人
	11日	大阪大学野田村サテライトの紹介 荒海ホタテ団の紹介	3人
	18日	村内保育所おゆうぎ会の歌声	2人
	25日	野田村の音楽サークル活動 ーコールさわらびとのだ吹奏楽団ー	6人
1月	1日	2015年を迎えて	1人
	8日	野田村歴史の会の取り組み	3人
	15日	小正月「なもみ」行事となもみ保存会	1人
	22日	自慢の産品紹介ーワカメとシイタケ	2人
	29日	文化活動サークル紹介 ーあっぷっぷとだらすこ工房ー	4人
2月	5日	食生活改善推進協議会の紹介	3人
	12日	チーム北リアスー写真班の取り組み	2人
	19日	女子からみた野田村の魅力紹介	1人
	26日	プレゼンター佐々木陵太の仕事と思い	1人
	28日	のだむラジヲのこれから	2人
レギュラーコーナー	野田村方言コーナー	1人	



写真2 「くじなのだ」放送の様子

してみたい」といった声が上がった。また、野田村の方言を紹介するコーナーを楽しみにしていたという意見もあり、試験放送に出演したり、聴いたりすることは、村での暮らしぶりや文化を再確認する機会となったようであった。さらに第3回創会（2015年4月12日）では、コミュニティラジオについて、村内と村外、発信側と受信側の4つをキーワードに意見交換を行った。その結果、コミュニティラジオは「村民同士の対話のツール」、「村民外の人との対話のツール」、「村内の情報交換」、「遠方に住む村出身との対話と情報提供のツール」、そして「村の記録・記憶の媒体」など5つの機能を持つ可能性を村民自身により確認され、共有された（写真3）。



写真3 のだむラジオの役割

このようにのだむラジオの取り組みは、4年目を迎えて村民全体の活動へと広がりを見せはじめた。そして、単なる情報伝達手段としてのラジオではなく、村民自身が村での暮らしぶりや歴史、文化を見つめなおす機会となり、震災の経験を記憶し、村の復興、自らの未来を語り、村内外に発信するツールとなることを村民自身が確認することとなった。のだむラジオの取り組みは、野田村のアイデンティを醸成する場となっていたのである（Atsumi, Ishizuka, & Miyamae, 2016）。

（2）軌跡2：のだむラジオを「ハブ」に

2016年度からは開局に向けて法人化手続きや電界調査などといった本格的な準備段階を迎えた。準備を進めるにあたって資金が必要となることから、岩手県

の「NPO等による復興支援事業費補助金」（2016、2017年度）を申請して採択され、活動に弾みがついた。村の中心部に新たに建設されたコミュニティ交流施設の一角を借りて、常設のスタジオを開設した。コミュニティラジオの必要性を村民に認知してもらうためには、定期的な放送を行うことが課題となっていた。それが常設スタジオをもつことで実現可能となり、スタジオが立地するコミュニティ交流施設で商工会と役場が中心となってはじめた、毎月最終土曜日に行われる夜市の時間に、定期放送を行うことにした。この時期には、放送活動をするメンバーが、少数ながらも充実してきた。放送技術を担当する前田豊氏は本業も放送業界で働くプロである。前田氏は野田村出身で現在の自宅は盛岡にあるが、高齢の親を介護するために週末は野田村で過ごす二地点居住をしながら、のだむラジオの放送活動を支えてくれた。また、ニュースレターの発行など、主に広報を担当している崎山久美氏は野田村役場の職員である。その他に代表の小野寺健二ほか数名の村民が、さまざまな形で活動を支えていた。

これらの仲間と法人化にあたって活動のミッションについて協議を重ねた。その結果、新たにつくる法人は、コミュニティラジオ放送を中心に、村内のさまざまな団体や活動をつなぐ「ハブ」のような機能をめざすこととした。いわゆる、まちづくり会社のようなものである。その拠点として常設のスタジオを活用していき、ラジオ放送だけでなく、さまざまな団体と協力して野田村を盛り上げるような活動へと広げることを試みた。具体的には、「のだむラジオフェスタ」を商工会青年部、商店会などと協力して開催した。また常設スタジオを実験工房に見立て『FabLab～Fabラジ～』と命名し、モノ・コト・オトの工房として運用していくことにした。モノづくりでは、村内に立地する県立久慈工業高校に協力してもらい、レーザーカッターを用いてオリジナルの人形づくりキットを開発したり、モノづくりワークショップを開催したりした（写真4）。またオトづくりでは、ラジオ放送をは

はじめ、番組づくりの勉強会などを村民むけに開催した。コトづくりでは、「のだむラジオフェスタ」として、バレンタインデーにちなんだイベントを複数企画し、その一つである村内の商店を訪問するとチョコレートがもらえる「スタンプラリー」を行い、子どもたちが村内を駆け巡った。

このように、のだむラジオはコミュニティラジオという枠組みを超えて、村づくりのハブとして様々な活動を展開していった。



写真4 モノづくりワークショップの様子

(3) 軌跡3：復興の記録・記憶「コミュニティ・アーカイブズ」

通常のテレビやラジオは時事を扱い、情報が流れていくメディアである。しかし、のだむラジオでは、時事情報の収集能力、量に限りがあったため、過去に制作した番組を再び流す機会が多かった。2016年9月25日に開催された夜市において、2014年12月18日エフエム岩手エリア限定ラジオ「くじなのだ」で放送した村内保育園おゆうぎ会の番組を再放送した。もちろん当初は、その年月に行われたおゆうぎ会の様子を伝えることを目的とした番組であったが、その約2年後の再放送では、子どもたちから「私が歌っていたんだよ」とか、大人からは「(子どもの声に) 元気ももらったねえ」と2年前を振り返り楽しむ人たちがいた。そして初めて聞いた人からは「いつ収録したのですか?」と関心をもち、再放送を聴くことで2年前の村の様子を思い出している人もいた。これはラジオ番

組が、時事情報としてだけでなくアーカイブとして機能し、特に震災のあった野田村では、復興の記録・記憶となる可能性を持つことを表していた。そこで筆者らは、コミュニティラジオ局の開設と関連した別軸の取り組みとして、ラジオ番組をアーカイブズとして活用することを試みた。

3. 復興ラジオからコミュニティ・アーカイブズへ

(1) コミュニティ・アーカイブズ

アーカイブズとは「国家や地方の行政組織や、企業、家や個人などの活動から作成された記録資料が非現用となった後に、アーキビストが評価・選別を行った上で移管された資料群およびそれらを保管・保存する施設」と定義される。しかし、アーカイブズ資料のデジタル化が進行する中で、アーカイブズは、対象、収集公開方法、そして編纂の意味づけも変革期を迎えている(研谷, 2015)。アーカイブズの評価・選別はアーキビストといわれる専門家だけでなく、市民が参画してアーカイブを構成していく手法(Community Archive: 例えば, Cook, 2013)が注目されている。

そのような中で起こった東日本大震災では、震災直後から様々な資料の収集、記録が行われ、国、自治体だけでなく市民活動としても多様なアーカイブズが構築された。収集内容は、①手記、②写真、③インタビュー、④映像、⑤音声、⑥ウェブサイトに分類できる(永村ら, 2013)。写真が約8割を占め、映像や音声などは少ない傾向にある(柴山ら, 2017)。また、収集時期が震災発生から1年以内のものが多く、震災前や復興過程など収集が継続できていない傾向も確認されている(柴山ら, 2017)。そして、その利活用は、これからの課題となっている。

野田村周辺では「久慈・野田・普代 震災アーカイブ」があり、約13万件の資料を収集している。その中で体験談については約2,000人分を収集しているが、文字情報として保存し、元の音声データの保存については関知しない状況にあった。このため野田村に

は音声アーカイブが少なく、のだむラジオが新たなアーカイブコンテンツを収集、提供できる機会となることを確認した。

のだむラジオで制作するラジオ番組は、アーカイブ資料分類という、インタビューと音声の記録である。これらの記録は、写真や手記と比較して少数であり、記録の経緯や出所、来歴などが不明な資料が多いことが課題となっている中、ラジオ番組として関連資料と共に保存していく活動は有用であると考えた。

(2) 番組制作を通じた災害復興・地域防災に関するアクション・リサーチ

本活動は(公財)電気通信普及財団助成「コミュニティFMの番組制作と災害復興・地域防災に関するアクション・リサーチ」の支援を受けて2017～2018年の2年間で実施した。2017年に「東日本大震災の記憶と子どもたちへのメッセージ」と題した村民インタビューを行い3つの番組を製作した。そして制作した番組をアーカイブとして活用する試みとして、野田村小学校6年生の「野田の元気をみつけようプロジェクト」で活用してもらった。2018年度は、村民インタビューによる2番組を追加制作した。そして昨年から引き続き野田中学校1年生となった生徒が取り組む「地域を調べる学習」と連携し、その成果発表の場である生涯学習発表会の場を介して、中学生による番組制作(および、そのアーカイブ化)を行った(表3)。

本アクション・リサーチでは、図1に示すとおり、ラジオ番組の制作、放送を通じて地域アイデンティティ

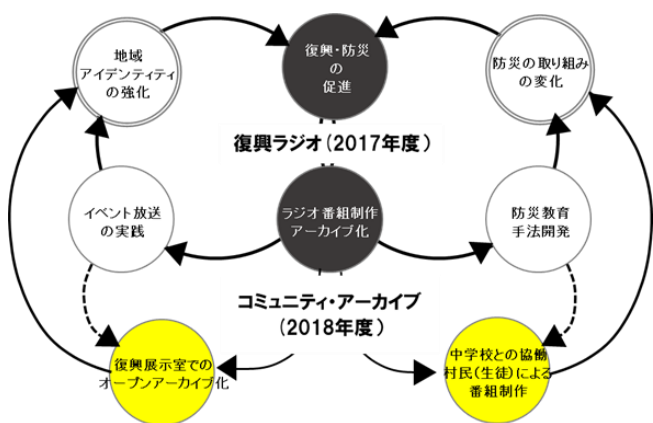


図1 アクション・リサーチの展開図

の強化をはかり、復興・防災の促進を図るとともに、ラジオ番組のアーカイブ化を防災教育に活かし、村民による番組制作が、さらに復興、防災の促進をはかるような循環を創っていくことをめざした。なお、表3に示すアーカイブ番組は、野田村が開設した復興展示室で保管、視聴できるようにし、オープンアーカイブ化する予定である。

表3 制作した番組

出演者	出演者の概要	主な内容
Sさん夫妻	自宅が津波に流されて被災。現在は高台の災害公営住宅に居住。民生委員として長年活動。	震災当日の体験談 仮設住宅での暮らしぶり 高台での暮らしぶり
NPO法人	震災直後に設立された地元NPO法人。子どもに笑顔を届ける活動を展開。	メンバーの被災体験 NPO法人の理念、活動内容
園芸店0さん	自宅、店舗ともに被災を免れる。地元の園芸店として仮設住宅で園芸講習会を行った。	震災当日の体験談 村の復興について 震災前後の気持ちの変化(仕事への誇り)
元漁師0さん	村の漁業の功労者であり、大正13年生まれの高齢者。	震災当日の体験談 過去の津波の経験と伝承について 村の復興について
郷土史会H氏	元行政職員で郷土史会会長。自宅は津波で流され被災。	震災当日の体験談 先祖からの教えについて 記念碑建立の経緯について

(3) ラジオ番組の可能性

2年間のアクション・リサーチの結果、ラジオ番組がアーカイブとして活用できる可能性、またそのアーカイブが、地域アイデンティティを醸成するツールとして十分な価値を持つことを確認した。特に番組制作は、住民自身による災害の伝承手段として主流である手記や語り部活動とは異なり、第三者となるインタビュアーとの対話から新たな語りが生み出される点が着目に値する。多くの対話の中から、貴重な記憶を発見することができ、当事者による当事者のためのアーカイブズへと成長していく可能性があるといえる。

手記や語り部は、当事者から聴き手への一方通行と

なりモノログとなりやすいが、番組制作では当事者と聴き手の間に進行役となるアナウンサーやインタビュアーが存在することでダイアログ（対話）となる。これまでのアーカイブズでは、写真や手記などが多数を占め、インタビューなどのダイアログ（対話）の記録は非常に少ないことがわかっている。調査手法としてアクティブ・インタビューなど、聴き手と語り手の相互行為による語りの活性化の重要性については既に指摘されているが、アーカイブズの収集技法として、ダイアログ（対話）の重要性は、これまで指摘されてこなかった。この活動を通して、コミュニティ・アーカイブズにおいては、ダイアログ（対話）による記録が有用ではないかという新たな仮説が生まれた。また、アーカイブは静的な集積物ではない。アーカイブへの集積は、その対象の選択、整理、保存などの過程が動的であり、アーカイブの利活用については、利活用の目的、環境などに応じて動的な対応が求められる。こうした動的なアーカイブ（アーカイビング）について、アーカイブを作成、維持、利活用する主体に注目し、アーカイブを巡る運動が社会にもたらす意義を射程に入れた議論としてコミュニティ・アーカイブの議論がある。せんだいメディアテークの「3がつ11にちをわすれない」プロジェクトなどの先進的な活動事例では、当事者の視点を重視し、他者の想起の可能性を開き、記録と収集、活用が連動したアーカイビングが展開されている。のだむラジオの取り組みも同様に位置づけることができるだろう。住民主体のラジオ番組制作は、コミュニティをベースにしたアーカイビングであるといえる。

4. 「のだむラジオ」の軌跡が語ること

のだむラジオの5年半の活動の軌跡を振り返ってきた。2020年9月現在、のだむラジオは残念ながら開局には至っていない。しかし、のだむラジオの活動が創ってきたものとして次の3点に集約できるだろう。

一つめに、のだむラジオが行ってきた移動スタジオ

放送、「くじなのだ」試験放送等は、多くの野田村民が自身の暮らしぶりや活動、仕事、そして震災を経た野田村の今を確認し、振り返る機会を提供したといえる。これらの機会は村民が自身のアイデンティティと野田村に感じるアイデンティティを確認する場となった。そして、その放送を聞いた村民（アクションリサーチでは生徒たち）にとっても、地域アイデンティティの醸成する機会に寄与していることがわかった。

二つめは「村づくりのハブ」の必要性が明らかになったことである。野田村には、それぞれに魅力的な団体があり、野田村への熱い思いをもって活動している。これらをゆるやかにつなぐことにより、さらなる発展の可能性を「のだむラジオフェスタ」などの活動を通じて確認した。のだむラジオは、その役割を十分に果たすことはできていないが、「村づくりのハブ」の必要性を示し、考える機会を提供したといえる。

そして三つめは、住民主体のラジオ番組制作が、コミュニティをベースにしたアーカイビングになる可能性を示したことである。佐藤ら（2018）は、コミュニティ・アーカイブズを、イリイチ（1973 渡辺京二・渡辺梨佐訳 2015）のコンヴィヴィアルな道具になり得るといふ。すなわち、コミュニティをベースにしたアーカイビングは「専門家に占有されてしまった技術」を「よりよく生きるための道具に転換させる」営みであり、個々人が周囲の事物や環境との間に、また周囲の人達との間に、自立しながらも相互に関わり合うことで、ともに生き活きとしている状態を作り出すことにつながる。『野田村民による野田村民のための野田村民のラジオ』をめざした番組制作のプロセスが『野田村民による野田村民のための野田村民のアーカイブズ』を創る道具になったと言い換えてもよいのではなかろうか。

震災から10年を迎えようとする時期に、筆者らはのだむラジオの活動を振り返る場を持ち、語りあった。

開局するには、免許取得の難しさや、資金調達の難しさがあったが、何より放送する人の確保が問題であったという結論に至った。数名の有志で活動していた

が、何が何でも開局したいと強く思う者がいなかった。そして広く村民に自分たちのメディアとして開局してほしいと考えてもらえるような役割を示しきれなかった。外部者として関わった者は「誰を応援しているのか、わからない」と感じた時期もあった。震災から5年、6年が経ち、仮設住宅からようやく退去できるようになり、日々の暮らしが落ち着いてきた時期に、「誰がどこまで何について本気になれるかが改めて問われる場を経験したように思う」と振り返った。何かに突き動かされるように活動が展開する災害直後とは異なり、復興という長い時間スパンの中で新たな事を興すことの難しさを経験したのである。

のだむラジオはコミュニティラジオ局という形は残せなかったが、地域アイデンティティの醸成と自立した村民によるよりよく生きるための活動のあり方を示し、コミュニティ・アーカイブズという運動の端緒を創った。東日本大震災の津波被災地では、ハード整備による復興は概ね完了した。これからの真の復興を実現するために必要な地域コミュニティの活性化が大切になる中で、のだむラジオの軌跡はローカルメディアの新たな役割と可能性を示したと言えるだろう。震災から10年が過ぎた野田村には、避難タワーを兼ねた復興展示室が開設され、震災伝承施設『3.11伝承ロード』の第三分類施設となった。のだむラジオで制作した番組は、村民の声のアーカイブとして活用される予定である。展示室での活動を通じて、村民が中心となりアーカイビングできるのか、今後の展開に期待したい。

補注

本稿は渥美公秀・貫牛利一（編）（2021）『東日本大震災と災害ボランティア 岩手県野田村復興への道』大阪大学出版会）第1章「五十にして天命を知る」（pp.19-20）、第9章「復興に向けた新たな活動に伴走する」（pp.241-258）を基に再構成した。

参考文献

- 渥美公秀・貫牛利一（編）（2021）．東日本大震災と災害ボランティア 大阪大学出版会
- Atsumi, T., Ishizuka, Y., & Miyamae, R. (2016). Collective Tools for Disaster Recovery from the Great East Japan Earthquake and Tsunami: Recalling Community Pride and Memory through

- Community Radio and “Picturesque” in Noda Village, Iwate Prefecture. *IDRiM*, 6(2), 47-57.
- Cook, T. (2013). Evidence, memory, identity, and community: four shifting archival paradigms. *Archival Science*, 13, 95-120.
- 江幡平三郎（2016）．「地域活性とラジオの力！」第五回のだむラジオ創る会講演資料
- イリイチ・イヴァン 渡辺京二・渡辺梨佐（訳）（2015）．コンヴィヴィアリティのための道具 ちくま学芸文庫
（Illich, I. (1973). *Tools for Conviviality*. Harper & Row.)
- 北郷裕美（2015）．コミュニティFMの可能性：公共性・地域・コミュニケーション 青弓社
- 研谷紀夫（2015）．デジタルネットワーク社会において複合化する記録資料とアーカイブズ, ka『メディア表象』 東京大学出版会 (pp.67-84)
- 松浦さと子・川島隆（2010）．コミュニティメディアの未来 晃洋書房
- 永村美奈・佐藤翔輔・柴山明寛・今村文彦・岩崎雅宏（2013）．東日本大震災に関する記録・証言などの収集活動の現状と課題 レコード・マネジメント, 64, 49-66
- 佐藤和久・甲斐賢治・北野央（2018）．コミュニティ・アーカイブをつくろう！：せんだいメディアテーク「3がつ11にちをわすれないセンター」奮闘記 晶文社
- 芝山明寛・北村美和子・ボレー・セバスチャン・今村文彦（2017）．近年の震災アーカイブの変遷と今後の自然災害アーカイブのあり方について デジタルアーカイブ学会